HANZAWA Tomomi

半澤 友美

半澤 友美

Tomomi Hanzawa

1988 年栃木県生まれ。2010 年女子美術大学立体アート学科卒業。2018 年ポーラ美術振興財団若手芸術家在外研修員としてアメリカ、メキシコ、カナダにて調査、研修。現在主に東京都を拠点に活動。「紙を作ること」に着目し、紙漉きの手法を応用、作品を展開。紙を人間の物語が内包する物体と捉え、その構造やプロセスを辿ることで自己や人間を取り巻く環境や構造、その背景について考察している。

Tomomi Hanzawa is Japanese Artist. Born 1988 in Tochigi, Japan. Lives and works in Tokyo. B.F.A., Sculpture Course, Joshibi University of art and design in 2010. Recipient of a Pola Art Foundation Grant for Overseas Study by Young Artists in 2018. She was a visiting artist and took the training in the paper studio in the SouthWest School of Art in San Antonio, Texas ,and She researched about papermaking in some parts of the USA, Mexico and Canada.
In her work with paper, she considers identity and the state of the self. Paper always gives her an incentive. Paper is the structure of intertwined fibers. There is a fact that paper has been made in various places around the world in different ways according to the environment and it has been developed for various purposes. Considering this fact, we can say that paper itself can be already considered as an object including our human story in itself. She unravels the story and superimpose it with "now" by tracing the paper structure and process, and questioning its origins.

皮膚で「見る」
The Eyes of Skin

MARUEIDO JAPAN では『皮膚で「見る」The Eyes of the Skin』を開催いたします。 本展覧会はフィンランドの建築家で現象学者のユハニ・パラスマー（Juhani Pallasmaa）の『建築と触覚　空間と五感をめぐる哲学』の文中にある「皮膚で〈見て〉いる」という表現から着想を得ています。

半澤友美は、〈 紙 〉の成り立ちに着目し独自の造形作品を創り出しています。植物繊維の絡まりからなる紙は、その原料を幾重にも重ねると強固な物体にもなりえます。半澤は紙漉（ かみすき ）の技法を応用し制作した平面、立体作品、インスタレーションなどを展開してきました。ひとつひとつの繊維が手作業で成形されていく紙と自らの経験とを重ね合わせ、思考を巡らせる中で、作品に時間や記憶などを内在化させていきます。

参考文献：ユハニ・パラスマー（Juhani Pallasmaa）著『建築と触覚　空間と五感をめぐる哲学』(2022 草思社 / 百合田香織訳
原題「THE EYES OF THE SKIN Architecture and the Senses」

MARUEIDO JAPAN/ 東京

MARUEIDO JAPAN is pleased to announce the holding of an exhibition called Eyes of the Skin. This exhibition is inspired by the expression "eyes of the skin" from the book The Eyes of the Skin: Architecture and the Senses by Finnish architect and phenomenologist Juhani Pallasmaa.
Tomomi Hanzawa creates unique sculptural art which is focused on the origins of <paper>. She uses the raw materials for paper, which is made from the pulp of plant fibers, and takes that pulp to build up layers to create a solid object. Hanzawa exhibits 2D and 3D works and installations created by applying paper making techniques. The paper, each fiber of which is formed by hand, is overlayered with her own experiences, and within her ponderings, she internalizes time and memories into her work.

References Pallasmaa, Juhani. The Eyes of the Skin: Architecture and the Senses (2022 Soshisha/translated by Kaori Aida)

MARUEIDO JAPAN, Tokyo

That reminds me

私たちは、紙の情報を見ると同時に、無自覚に、紙を触り、ついた汚れを見て、漂うコーヒーの香りを嗅ぎ、遠くで聞こえる人の会話を聞く。理解と記憶を生み繋ぐのは、そんな無意識下の体感、あるいは体験なのかもしれない。

At the same time that we see information on paper, we also unconsciously touch the paper, see the stains on it, smell the aroma of coffee in the air, and hear the conversations of people in the distance. It may be such unconscious experiences that create and connect understanding and memory.

2023
木材パルプ、土性顔料、紅茶、コーヒー、油、他
Wood pulp, earth pigments, tea, coffee, oil, etc.
w127×h179cm

In white

2023
木材パルプ、土性顔料、ワックス、白土
Wood pulp, earth pigments, wax, white clay
w80×h170cm

Maybe it happened, maybe I know

2023
木材パルプ、土性顔料、紅茶、コーヒー、油、蜜蝋他
Wood pulp, earth pigments, tea, coffee, oil, etc.
w106×h145cm

8月18日水ようび　朝ごはんパンと野さい
8月19日木よう日　朝　パンやさい　ひる
8月20日金よう日ようび　朝　月土よう土よう19
朝　6時33分34分　パンとやさい　ひる　肉やさいかぼちゃ　よる　なつとう

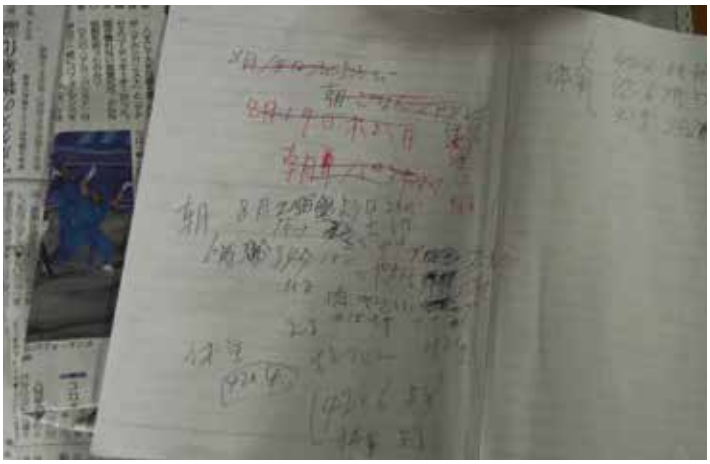
祖母の周囲に、彼女の直筆のメモが書かれた紙片を見つけるようになった。
メモ用紙、卓上カレンダーの裏、封筒の端っこ、トイレットペーパーの芯。
あまりにも紙を探し求める祖母に1冊のノートを渡すと、
祖母は食卓に座るたびにそこにメモを取るようになった。

転んで腰を痛めた祖母は、じわりじわりと出来ていたことが出来なくなっていった。
スーパーに買い物に行くこと、料理を作ること、
テレビを見ること、ラジオをつけること、電話をかけること。
新型コロナウイルスの流行も重なって、
よく祖母の家に顔を出していたご近所さんと会話をすることも無くなってしまった。

朝昼夜の認識が曖昧になり、カレンダーも読めなくなった祖母は、
食事をするたびに、今日が何日で何曜日なのかを私に聞いてきた。
携帯を見て教えてあげると、祖母はそれをその時に食べたものなどと一緒にノートに記した。
何度も以前のメモを確認して、場合によっては同じ内容を繰り返し書き記していたのは、
流れていく時間の中に浮かぶ泡のような今を、
あるいは自分自身という存在ををどうにかして掴まえようとしていたのかもしれない。

「最近どう？」と尋ねると「夢の中が楽しくって幸せなのよ」と答える祖母は、もうメモを残さない。
今に過去も夢も交ざりあう中で、彼女は日々自由な漂流を楽しんでいる。

2023年6月　半澤友美



生々流々
Live Each Day

「シン・ジャパニーズ・ペインティング」（ポーラ美術館、神奈川、2023 年）にて展示。半澤友美が楮（こうぞ）を用いて制作した全長約 40 メートルにおよぶ樹皮紙には、作家の祖母によるメモ書きが入れ込まれている。横山大観が " 水 " の一生を描いた大作《生々流転》の現代版ともいえる本作は、《生々流々》と名付けられた。

This work was exhibited in "Shin Japanese Painting" (Pola Museum of Art, Japan, 2023).Tomomi Hanzawa created this 40-meter-long piece of handmade tree bark paper using kozo (paper mulberry), and included a note written by the artist's grandmother. The work is a modern version of Yokoyama Taikan's " Metempsychosis ", a large-scale work depicting the life of "water".

2023
楮、印刷物（祖母のメモ書き）
paper mulberry, printed material
56×4140cm

叙景
In view of our life

2023
中之条町の桑
Mulberry I got in Nakanojo Town

国際現代芸術祭
「中之条ビエンナーレ 2023
コスモグラフィア - 見えない土地を辿る -」
中之条町 / 群馬県
半澤友美展示・旧五反田小学校
Art Contemporary festival
"NAKANOJO BIENNALE 2023
Cosmographia-Tracing the Invisible Land-"
Former Gotanda School,
Nakanojo Town, Gunma, Japan

住まわれた世界とはそうした踏み跡の入り組んだ網細工であり、生がそれらの踏み跡に沿って進んでいくに連れて絶え間なく織られ続けるものである。 ティム・インゴルド『ラインズ――線の文化史』-

中之条町ではかつて養蚕業が盛んに行われていた。その名残が町に残る桑の木から感じられる。桑畑は少なくなってしまったが、桑の木はまだあちこちに残っている。今回の制作は中之条町六合赤岩地区にあるそういった桑の木を採集することから始まった。採集した桑の木の皮を組み並べ、石で叩き、繋げ広げた。
人が住まう世界は、時間や環境を織り込みながら築かれ続けている。私はこの土地に根付く桑の木から営みの景色を辿る。

In the past, the sericulture industry was active in Nakanojo town. There used to be many mulberry fields. The mulberry trees in the town remind us of the past. First, I started cutting and collecting the mulberry trees growing in the Kuni Akaiwa area. Next, I harvested the bark. I pounded it with stones, then assembled and spread it out.
Human beings have been living while interweaving time, situation and so on. I trace the process of our life using the mulberry trees in this area.

PAPER：かみと現代美術
A Quest into the World "with" PAPER

今から2000年以上も前に発明されて以来、私たちの生活のあらゆる場面に浸透した必要不可欠な素材、「紙」。情報の記録や意思伝達をはじめ、ものを包む、液体を拭う、光をとおす・・・など、その機能と役割は枚挙にいとまがありません。「紙」の幅広い活躍は、しなやかで応用しやすい性質や特長によるものですが、そこには人間が与えた何らかの操作や社会の中での機能が伴っています。「紙」になるまでも「紙」となってからも、人とのかかわりなしには存在しない素材なのです。

本展ではそのような「紙」「紙製品」に注目し、独自の表現へと昇華させた現代アーティストをご紹介します。彼らの作品は「紙の上に」ではなく、「紙とともに」アイデアを視覚化したものと言えます。誰にとっても馴染みのある「紙」をとおして、本展のアーティストたちが投げかける問いは、私たちを取り巻く世界や価値観を様々な角度から照らし出してくれることでしょう。

半澤友美は「紙」がひとつの造形物であることに目を向け、そこに制作の起点を置いています。その大きな特徴は、「作品」と「紙」が地続きになっていること。つまり、表現行為と「紙を作ること」が一致している点にあります。半澤は、繊維の絡まりによって成り立っている紙の構造、土地の環境や自然条件によって異なる生成方法、記録を目的に発展してきた素材であることなどを踏まえ、そこに「アイデンティティ」や「自己」の考察を重ね合わせた作品を制作しています。

半澤は、紙工房での長期研修でアメリカに滞在していた際、日本では見かけない太いスポイトと出会いました。それはローストチキンを作る際に、鶏肉に肉汁やソースをかけるための調理用具。半澤はこの道具にヒントを得て、水に溶いたパルプを一滴ずつ垂らすことを思い付きます。《Self》《Traces》は、スポイトからドロップされた紙料の「粒」が重なり合い、絡まりあうことでできている作品です。スポイトから垂らされる紙料の一滴を、作家は、経過した時間の中にある出来事、経験、人間関係の断片として読み替えます。時間は単線的にとらえられがちですが、1人の人間が体験した時間は、その「自己」を形成する上で複雑に絡みあって影響しているはずです。

また今回半澤は、樹皮紙（じゅひし）を取り上げた新作《Trails of intersecting》も発表します。樹皮をたたいて薄くの延ばすことでシート状の「紙」にしていく樹皮紙は、「漉く」とは異なる「紙」です。半澤は、紐状の細長い楮（こうぞ）を斜めにクロスさせ、線をたどっていくようにたたきます。構造とプロセスをたどり、成り立ちについて問うことが、半澤の作品（かみ）なのです。

熊本市現代美術館

Self

2019-2022
木材パルプ、染料、柿渋、アマニ油
Wood pulp, dye, persimmon tannin, linseed oil
variable size, 86×66cm each

Traces

2022
木材パルプ 、土性顔料、金網
Wood pulp, earth pigment, wire mesh
w101×d8×101cm

Trails of intersecting

2022
楮、土性顔料
paper mulberry, earth pigment
w43×h55cm

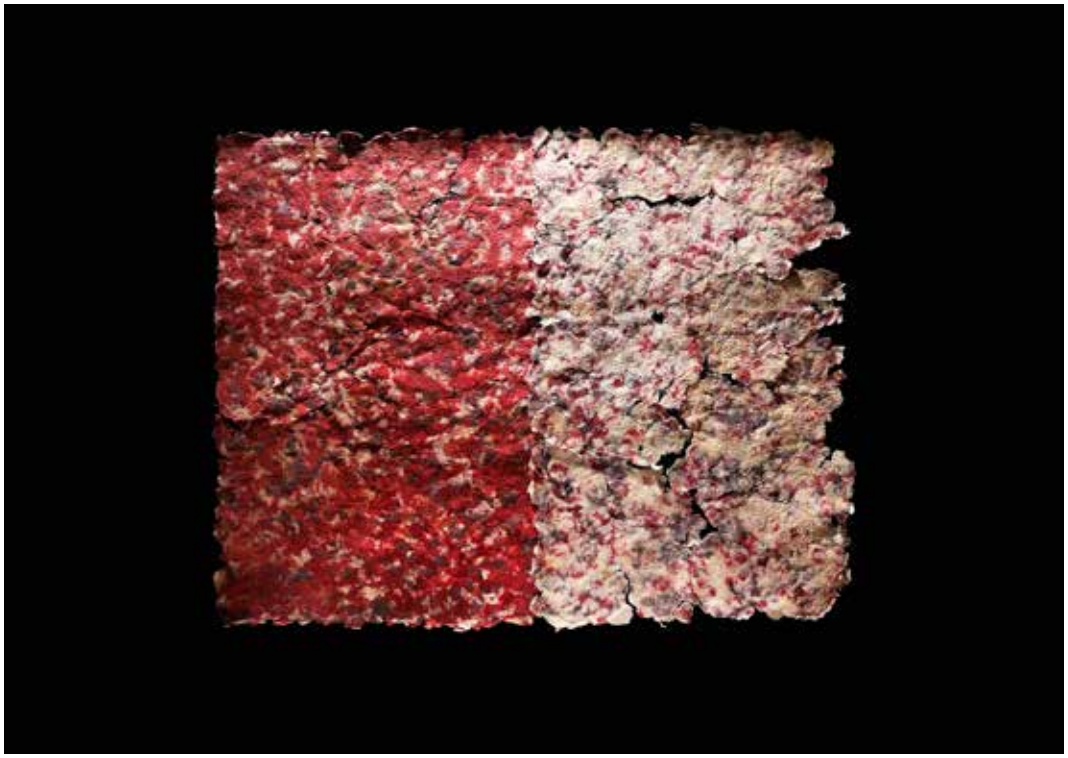
HIRAKU PROJECT Vol.9
半澤友美展「The Histories of the Self」
HIRAKU PROJECT Vol.9
Tomomi Hanzawa Exhibition "The Histories of the Self"

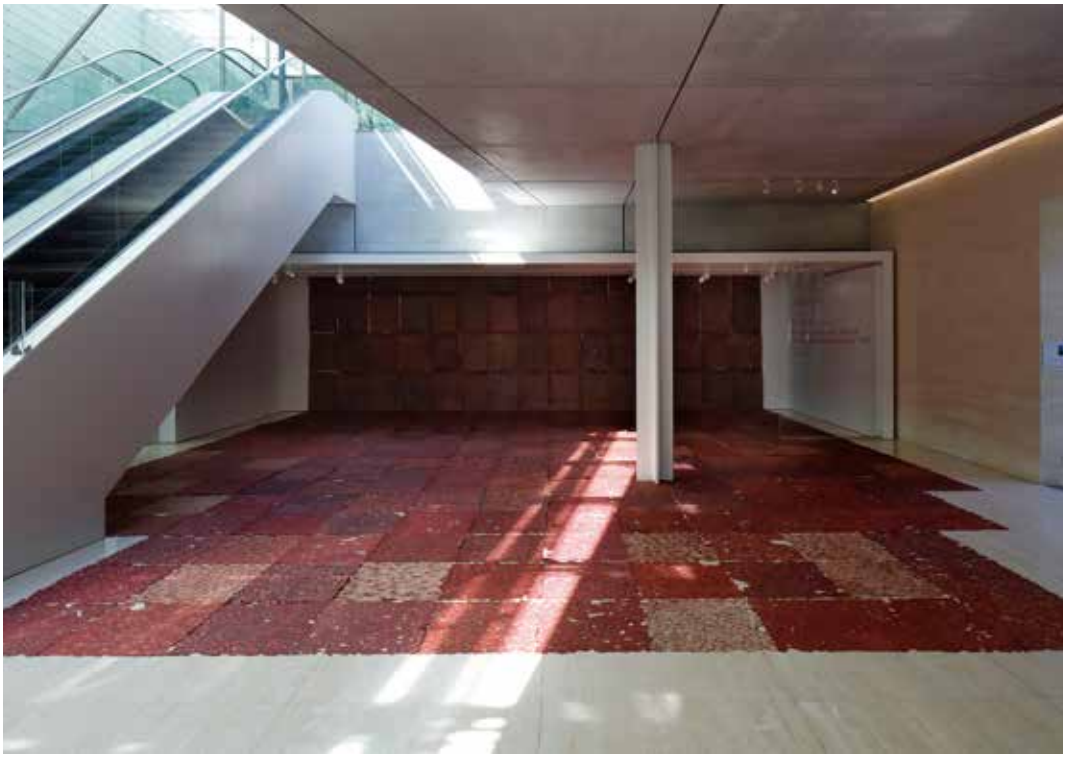
本展では、開放的な展示空間の特性を考慮しながら丹念に制作された、約 300 枚の紙で構成するインスタレーションを初公開いたします。「The Histories of the Self」というタイトルは、このインスタレーションの制作方法に由来するものです。半澤は、植物の繊維が絡み合った、着色された原料を平らな板の上にスポイトで点々と垂らし、それを幾層も重ね、プレスにかけて一枚の紙を作ります。
こうして制作された数多の紙は、赤や朱、紫、褐色などの紙の原料の選び方や厚み、プレスのかけ具合などの条件によってそれぞれ異なります。紙の素材感豊かな本作品は、素材のもつ儚さやまだらな色のありようによって、不穏な雰囲気を漂わせ、観る者それぞれが積み重ねてきた時間の存在と向き合うことをうながしています。

ポーラ美術館

This exhibition will feature for the first time an installation consisting of approximately 300 sheets of paper, painstakingly created while taking into consideration the characteristics of the open exhibition space. The title "The Histories of the Self" is derived from the way this installation was created. Hanzawa dots colored raw materials made of intertwined plant fibers on a flat board with a dropper, layers upon layers of the material, and presses them to create a sheet of paper. The numerous sheets of paper produced in this way differ from one another according to the selection of raw materials, thickness, and pressing conditions of the paper, such as red, vermilion, purple, and brown. The work is rich in the materiality of paper, and the fragility of the material and the speckled colors create an unsettling atmosphere that encourages each viewer to confront the existence of time that has accumulated.

Pola museum of Art





The Histories of the Self

2019
木材パルプ、染料、柿渋、亜麻仁油
Wood pulp, dye, persimmon tannin, linseed oil
variable size, 86×66cm each（Photo:KeizoKioku）

繊維のネットワーク、あるいはインターネットとしての個人史――半澤友美の近作をめぐって

北澤憲昭

半澤友美の作品は、和紙の成り立ちをモティヴェイションとしている。それゆえ、彼女の作品について語るためには、まず和紙の成り立ちについて見ておかなければならない。

紙は、繊維の絡まりからなる平板な物体である。ふだんは、その物体性が意識されることは少ないが、数百枚だと物体性を強く帯びるし、たった一枚で物体性を強く感じさせるものがある。身近なところでは手漉きの和紙がよい例だ。繊維の絡まりによって成り立つ一個の物体として和紙は存在している。その実在性は、視覚にも触覚にも訴えかけてくる。
和紙の製法には二種類ある。ひとつは「流し漉 [す] き」といって、楮や雁皮など植物の繊維に接着剤を混ぜた「紙料［しりょう］」と呼ばれる液体を、すだれ状の底をもつ木枠に掬い取り、繊維を絡ませる工程を繰り返すやり方だ。いまひとつは、同様の作業を一回のみで終了させて枠の底に絡まり合って沈殿した繊維を得る「溜め漉き」というやり方である。
このようにして得られた湿ったシートから水分を圧搾し、乾かすことで和紙が得られる。

半澤友美の作品は、こうした和紙の成り立ちを踏まえている。たとえば､金網に楮と麻の繊維を絡ませた《Some Rooms》(2018)という屏風状の作品は、縦横無尽に絡まりあう繊維の様態そのものといっても過言ではない。ここには和紙の成り立ちが見てとられる。
〈The histories of the self〉と題された最近のシリーズでは、紙料を調理用スポイトで点々と垂らして、幾層も重ねたものに圧をかけて一枚の矩形のシートに仕上げている。シートは赤や緑など単色を基調とするものと、基調の定まらないものとがあるが、どれも、まだらに濁っている。圧力のために点はつぶれて不定形に広がり、全体の印象はアンフォルメルの画面を思わせる。ケナフとコットンの繊維が用いられているので材料的には洋紙ということになるのだが、制作手順は「溜め漉き」の応用ということができる。洋紙にもちいる繊維は和紙よりも短いことにも留意する必要があるものの、不定形に押し拡げられた滴りを一枚の紙に見立てるならば、紙の面積と繊維の長さとの比例関係は和紙に近づく。

この作品の成り立ちは、巨大な蜘蛛の巣のようなインターネットの拡がりへと思いを誘わずにはいない。点状の繊維の絡まりを一つのコンピュータネットワークに見立てるとき、それが幾つもつながり、重なり合って形成されるシートはインターネットと見なすことができるのだ。
だが、これは現代社会のたんなる寓話ではあるまい。〈The histories of the self〉というタイトルは、滴りのひとつひとつを「自己」として捉えることへと見る者を促している。多様な関係の結節点 [ノード] としての自己である。仏教の縁起説からすれば目新しい発想ではないものの、近代が育んでき　た実体的な自己イメージに対する批判的捉え返しの契機として、この発想は重要な意義をもつ。
しかも、制作手順に沿って考えるならば、滴りの連続はhistorical な事態として受け取るのが順当だろう。シートの一枚一枚には、ひとりひとりの人間の個人史が寓されているわけだ。あるシートが同系色でまとまっていても、そこに微妙な差異がざわめいているのは、アイデンティティの時間軸上の揺らぎとみることができる。

時間軸に沿って一種のインターネットとして形成される個人史。半澤友美の近作は、インターネット以後を生きるわたしたちの「自己」の有りようについて問いかけている。触覚性ゆたかな紙の実在性において、ふっくらと、やわらかく、しかし、はかなく、どこかしら不穏な雰囲気を漂わせながら、しずかに作者は問いかけている。

（2019 年　半澤友美展「The Hisories of the Self」）

The Histories of the Self

ポーラ 美術館学芸員　内呂博之

紙の原料となる植物繊維を使い、独自の造形をおこなう半澤友美（1988 −）は、近年は人物の大きさほどの立体作品を作ってきた。それを仮に人体とみなすのであれば、肉を支える強靭な骨格を要する。そこで選ばれたのが金属製の網であった。金属網にどろどろの紙料（紙の繊維）を流すと、網に繊維が絡まり徐々に肉の部分が形成されてくる。紙料を幾度も重ねることで、肉は厚くなる。そして、乾燥することで確かな形が定まり、物質感をともなった立体となる。これが人体とみなす所以である。形が決まると、作品の内と外の境界が定まる。境界の内側は、外側からの影響や働きかけによって、様々に変化し得る。それは人間の精神も同様であろう。

いわゆる立体や半立体の作品を作りつづけてきた半澤は、2018年にアメリカの紙工房で研修を受ける機会を得、さらにメキシコ、カナダに赴き現地の手漉き紙に関する調査をおこなった。その過程において現地で入手可能なケナフとコットンのみによる、モノトーンの〈紙漉きによるドローイング〉（2018 年）のシリーズを試みている。これらは、和紙の原料を用い、立体的な構造体を制作するそれまでの表現手法とは異なり、「溜め漉き」と呼ばれる紙漉きの方法を応用することによって制作された平面性のある作品群である。すなわち、異なる種類の紙料を載せ重ねてプレスすることで得られるものであり、紙料の載せ方――太さや厚さ、形など――を変化させることで、作品の表面には無作為な紋様のような形態が表れる。

この〈紙漉きによるドローイング〉を発展させたのが本展に出品されている〈The Histories of the Self〉（2019 年）のシリーズである。赤や朱、紫、褐色などに着色した紙料の粒を載せ重ね、プレスすることによって作られるこの一連の紙作品は、その色材の種類や量、紙料の重なり具合によってそれぞれ異なる表情をみせる。そのようにできた紙の独自性を、半澤は「個性」と呼び、また紙作品そのものを「自己」と呼ぶ。自己は様々な要素（生まれ育った場所や人など）との関係性で成り立つように、半澤の漉く紙もまた繊維の積み重なりや、繊維の関係性によって成り立つ。金属網のような骨格はなくとも、環境によって変化しやすい平面ゆえにその個性は際立ち、そこに表れた色は人間の血と肉、肌、そしてあらゆる生物を育む大地の色に思えてくる。

半澤の作品の重要な工程として「乾き」の時間がある。プレスによって大方の水分を取り去った紙を、板に挟んでゆっくりと乾燥させて繊維をなじませる時間はもちろんだが、その後の工程である柿渋の塗布と色彩に深みが出るまでの乾燥時間、そして仕上げとしての乾性油（アマニ油、クルミ油など）の塗布と色彩に深みが出るまでの乾燥時間、そして仕上げとしての乾性油（アマニ油、クルミ油など）の塗布と柔らかな光沢が出るまでの乾燥時間である。半澤は、自身の作品が置かれる環境を想定して柿渋や乾性油の量を調節するが、作業環境の影響によって塗料の乾燥時間は思い通りにならない。だが、それゆえに思いがけない効果も生まれる。作品には自己が宿り、作品は独り立ちする。これこそ、半澤が作品に求めることであろう。

（2019 年　半澤友美展「The Hisories of the Self」）

The Histories of the Self

2020
木材パルプ、染料、柿渋、亜麻仁油
Wood pulp, dye, Persimmon tannin, Linseed oil
w78.5×d6×h98.5cm

半澤友美展「Narrative Act」
Tomomi Hanzawa Exhibition "Narrative Act"

物語を語ることは、語りの中で過去の出来事を〈関係づけて語る〉ことであり、他者が過去の生のさまざまな糸を何度も手繰りながら自分自身の生の糸を紡ぎだそうとするときに従う、世界を貫く一本の小道を辿り直すことである。（ティム・インゴルド『ラインズ　線の文化史』）

Narrative act（物語行為）は私が私を見るために有効な手段の一つです。社会や時間との絡まりの中で織りなされる私について、出来事を関連づけながら、選択・配列し、Narrative（物語）を作り出します。紙の上においては読むことができる表面に置かれる痕跡として Narrative は出現しますが、紙を構造物として見た時に、紙と痕跡が形成される過程で生成される軌跡の存在に気がつきます。そこに至る過程での出来事、それと同時に起きている出来事、世界のなかでそれに続いて起こる出来事、などとの関係が交錯する中、自分自身を位置付ける、または意味付けるための選択しをし、配列した線を辿ることで、Narrative act は行われるのではないでしょうか。
表面から構造へ、軌跡へ、成り立ちへ、そして自己へ
あらゆる関係の絡み合いへの興味と自覚は生の在り様そのものを深くみつめることになるのではないかと考えています。

Narrative act is one of the effective means by which I see me. It creates Narrative by selecting and sequencing events, relating them to each other, about me as I am woven into the fabric of society and time. On paper, the narrative appears as a trace on a readable surface, but when we look at paper as a structure, we notice the existence of traces generated in the process of forming the paper and the trace. Narrative acts may be performed by making choices to position oneself or to give meaning to oneself, and by tracing the lines that have been arranged in the intermingling of the relationship with the events that have occurred in the process of getting there, the events that are occurring at the same time, and the events that follow in the world.

From surface to structure, to trajectory, to origins, and to self.I believe that an interest in and awareness of the intertwining of all relationships will lead to a deeper look at the very nature of life itself.

Narrative act

2022
籐、楮、漆喰、土性顔料
Rattan, paper mulberry, plaster, pigment
w67.5×d6×h91.5cm

Untitled

2020
籐、楮
Rattan, paper mulberry
w92×d6×h92cm

Position（彼女と湯呑み）
Position(she with teacup)

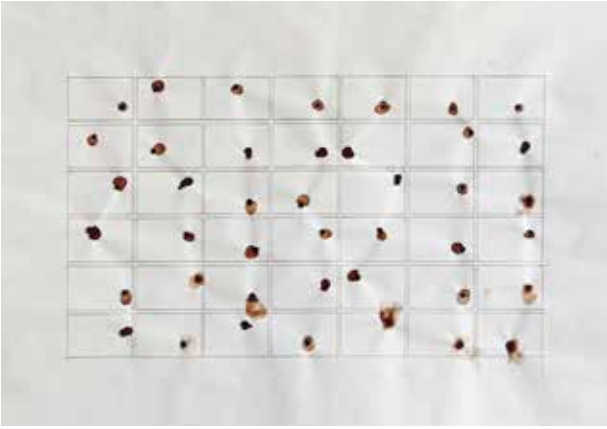
2021
和紙、柿渋、墨、湯呑み
Japanese paper, persimmon tannin, ink, Japanese teacup
w180×d30×h108.5cm

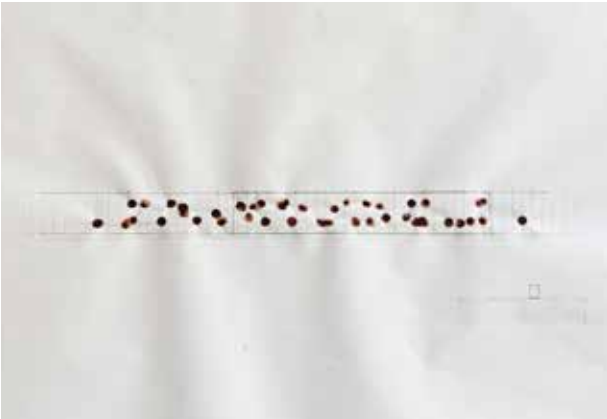
「いつも、おなじ時刻にやってくるほうがいいんだ。・・・
きまりがいるんだよ。」

サン＝テグジュペリ『星の王子さま』の中で、キツネは王子さまにこう言った。私たちは意識的にせよ無意識的にせよ、それには関係なく「きまり」を繰り返している。
この数年すっかり家から出ることがなくなった私の祖母は、毎日彼女の持つ食器を選んで並べる。彼女は自分の器を数多く所有している。その中でも彼女が日常に使用するのは約10種類であり、都度その中の一部を選びだし、自分の目の前に並べ置く。配膳マナーが意識下にありつつも、身体の都合を気にするようになった彼女の器の配置は毎日異なり、器を持ち上げ置き直すたびにその配置はさらに変化していく。彼女は彼女の位置を測定し続ける。ハイデガーは「詩人的に人間は住む」と言うヘルダーリンの詩句に言及しつつ「詩作するとは測ることである」と書いているが、物理的な距離だけではなく、彼女の在り様を彼女は測っていると言ってもいいだろう。

「そいつがあればこそ、ひとつの日が、ほかの日とちがうんだし、ひとつの時間が、ほかの時間とちがうわけさ。」

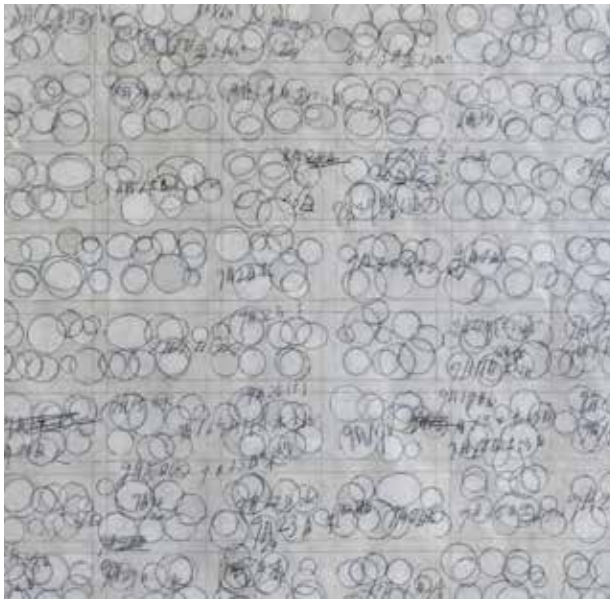
キツネは「きまり」について王子さまにこう説明する。「きまり」を繰り返すということは生じる差異からみてもある一瞬を取り出すことである。彼女による彼女の器を配置するという繰り返される行為は、彼女の位置を測定し、彼女自身の「今」を取り出すための「きまり＝儀式（rites）」ではないだろうか。並んだ器は儀式によって取り出された「今」の痕跡である。その「今」はすぐに過去のものになり、記憶になり、回想され「今」に引き戻されつつも、また新たな「今」へと更新される。『方丈記』に書かれた川の流れの水のようにの水ではなく、泡沫のようにとどまることはない。ただその永遠のような川もまた「今」だろう。様々な今が私たちと私たちの周囲には流れている。キツネが言うように、うつろう「今」を生きる私たちにとって、「きまり」は大切な要素ではないだろうか。
私たちが普段やり過ごしている儀式の痕跡、「今」の回想録をもってして、私は（新たな）「今」を生起させようと試みる。





Position（彼女と湯呑み）のためのドローイング
Drawing for Position (she with teacup)

鉛筆、柿渋、紙
Pencil, persimmon tannin, paper
51.5×36.4cm



ドローイング
Drawing

祖母が毎日置く食器の位置を記録したドローイング。
彼女の何気ない行為から彼女自身を知る。

Drawings documenting the position of the dishes that my grandmother would place each day.
I learn about her herself from her casual actions.

2021
鉛筆、色鉛筆、和紙
Pencil, colored pencil, Japanese paper
w60×h80cm

半澤友美展「Note」
Tomomi Hanzawa Exhibition "Note"

この度、MARUEIDO JAPAN では半澤友美「Note」を開催いたします。半澤友美は、紙の成り立ちに着目し独自の造形作品を創り出しています。植物繊維の絡まりからなる紙は、その原料を幾重にも重ねると強固な物体となります。半澤は日本の紙漉（かみすき）
の技法を応用し立体作品を制作してきました。昨年、箱根のポーラ美術館アトリウムギャラリーでの大掛かりなインスタレーション「The Histories of the Self」では、会場に何百枚の連作を展示し大変注目を集めました。その展示でも見られたように、半澤は紙と自己に向き合い続け、その都度自己を顧みる記録として、まるでノートを取るかのように制作を続けています。

今展覧会タイトルにもなった「Note」のシリーズは、金網に幾重にも紙の繊維を絡ませ積み重ねられた作品です。金網の人を寄せつけない金属的な強さと、紙の柔らかさを同時に併せ持っています。 時間と記録が集積された作品たちは、会場で佇み現代の碑のように見た者に何かを問い掛けて来ます。

MARUEIDO JAPAN/ 東京

MARUEIDO JAPAN is pleased to announce that it will hold an exhibition by Tomomi Hanzawa called Note. Tomomi Hanzawa creates unique sculptural art which is focused on the origins of paper. She uses the raw materials for paper, which is made from the pulp of plant fibers, and takes that pulp to build up layers to create a solid object. Hanzawa creates three dimensional works by applying Japanese paper making techniques. Last year, in the atrium gallery of the Pola Museum of Art in Hakone, her ambitious installation “The Histories of the Self” featured an eye-catching exhibition collection of hundreds of artworks focused on one subject. As could be seen at that exhibition, Hanzawa continues to confront both paper and herself, and she is pursuing the creation of art like a form of note-taking to record her own reflections at all times.

Her “Note” series, which also the title of this exhibition, are artworks that consist of paper pulp layered on metal meshes. These artworks simultaneously unite the metallic strength of metal meshes which have characteristics that repel people, and the softness of paper.
They are artworks which integrate time and records, and that ask questions of the viewer standing in the exhibition space, and who are looking at the art as if it is a modern monument. We would be delighted if you could take this opportunity to visit our gallery, and experience the work of a very unique artist.

MARUEIDO JAPAN, Tokyo

Note

ポーラ 美術館学芸員　内呂博之
Curator, Pola Museum of Art　UCHIRO Hiroyuki

造形作家の半澤友美（1988 −）は、紙の原料となる植物繊維を自在に操り、2 次元的ないし 3 次元的な独自の造形物を創り出す。たとえば、2018 年に発表した《Some Rooms》（2018）は、楮と麻の繊維を金網に絡ませた高さ 1.5 メートル、幅 3 メートルの屏風状の作品であるが、繊維の痕跡が顕わとなったその構造体の存在感は展示空間において際立つものの、周囲の環境と相互に作用しながら、穏やかに共生するかのようであった。一方、2019 年に箱根のポーラ美術館で発表した〈The Histories of the Self〉と題されたシリーズは、おもに赤や赤紫に染めた紙料（紙漉きの原料）を調理用スポイトで平面上に点々と垂らし、それを幾層も重ねたものに圧をかけて一枚の矩形のシートに仕上げたものである。300 枚におよぶ有機的な平面作品を、床や壁面に並べて取り付けた壮大なインスタレーションは、コンクリートや大理石、ガラスを主材とする無機質な建築空間との調和を生み出すこととなった。

さて、現在、半澤が取り組んでいるのは、紙の繊維を菱形の金網に絡ませて作る矩形の半立体作品である。金網に規則的に凹凸をつけるとそこに空隙が生まれ、金属に紙の繊維を絡ませることで徐々にその空隙はハニカムの孔（正六角形というよりはむしろ中空円筒状）の様相を呈する。繊維の量を増やせば増やすほど無作為的で複雑なテクスチャーが形成され、さらに漆喰と土性の絵具を効果的に施すことによって、硬軟相俟った独特の視覚効果が生み出される。半澤はこのような特徴的な半立体オブジェとともに、それを何層にも重ねることによって濃密な立体的な作品（立方体オブジェ）を創り出すことにも挑戦している。

半澤はいかなる形態の作品を創ろうとも、最も重要視していることは各作品における紙の独自性である。半澤はそれを「個性」と呼び、また作品そのものを「自己」と呼ぶ。一般的に自己は様々な要素（生まれ育った場所や家族、友人など）との関係性で成り立つように、半澤の作品もまた繊維の積み重なりや繊維どうしの繋がり、時としてそれらを物理的に支える物質（金属など）との関係性によって成り立つ。さらに作品は、それを取り巻く環境へと作用を及ぼし、また及ぼされるのである。半澤は自身の作品を通して、見る者との関係性を構築することを希求し、見る者からの反作用に期待を寄せている。

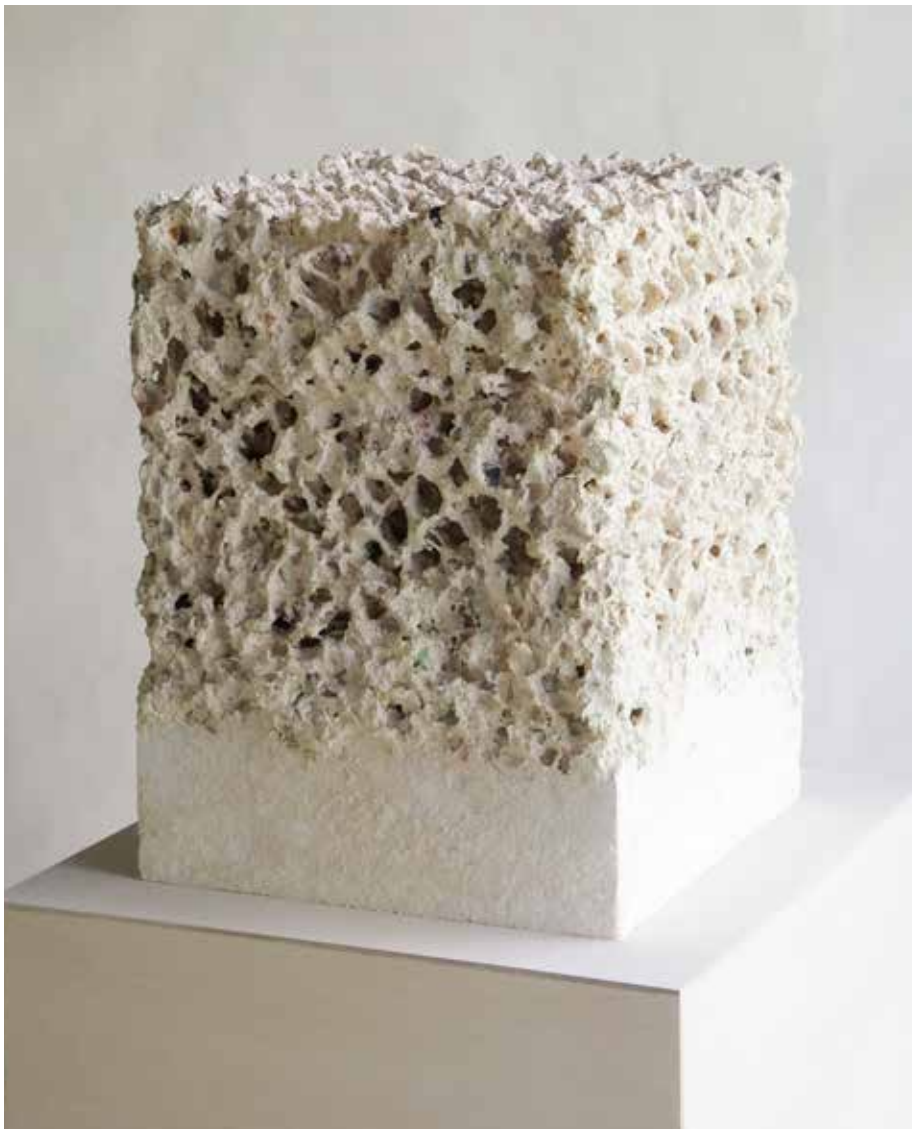
（2020 年　半澤友美展「Note」）

Artist Tomomi Hanzawa (born 1988) freely manipulates plant fibers which are the raw materials for paper, and produces unique 2D and 3D molded objects.
For example, her art piece "Some Rooms" (2018) is a folding screen-like work made of paper mulberry and hemp twined in a metal mesh, which is 1.5 meters tall and 3 meters wide. However, the presence of this structure, which gives expression to the traces of fibers, stands out in the space of the exhibition room yet at the same time, seems to interact and live in harmony with the surrounding environment. On the other hand, in her series entitled "The Histories of the Self," which was exhibited at the Pola Museum of Art in Hakone in 2019, she used a cooking syringe to apply drops of a raw material for paper, which had been dyed red and reddish purple, onto a flat surface, and by applying pressure onto layers of these drops she created singular rectangular sheets. This magnificent installation of 300 organic flat artworks, which for the exhibition were mounted across the whole floor and walls, created a harmony with the principally inorganic, being made of concrete, marble, and glass, building space.

Now, Hanzawa is tackling rectangular semi-3D art made by wrapping paper fibers into a diamond mesh. Cavities appear if the regular shape of a metal mesh is made irregular, and then by entwining paper fibers with the metal mesh the cavities gradually take on the appearance of honeycomb holes (Hollow cylinders rather than regular hexagons). Increasing the amount of fiber enables the forming of more random and complex textures, and furthermore, by effectively applying paints based on plaster and earth pigments she creates a unique visual effect that combines hardness and softness. Hanzawa is also taking on the challenge of creating dense three-dimensional artworks (cube objects) by overlapping multiple layers of her unique semi-3D objects.

Regardless of the form of the artwork that Hanzawa sets out to create, the most important aspect is the unique paper in each artwork. Hanzawa calls this “personality,” and the work itself she calls “the self.” Typically, the self consists of relationships between a variety of elements (such as where one was born and raised, family and friends, etc.), and Hanzawa's art also consists of the connections of stacked up fibers, as well as between the fibers themselves, and their relationship with the materials (metals, etc.) that at times physically support them. In addition, her art has an affect and acts on the environment surrounding it. Hanzawa is craving to build a relationship with the audience through her own art, and has high expectations of a reaction from the audience.

(Tomomi Hanzawa Exhibition "Note", 2020)



備忘録
Note to self

2020
木材パルプ 、楮、土性顔料、漆喰、金網
Wood pulp, paper mulberry, earth pigment, plaster, wire mesh
w31.5×d31.5×h42cm

Note

2021
木材パルプ 、楮、土性顔料、漆喰、金網
Wood pulp, paper mulberry, earth pigment, plaster, wire mesh
15×15×16–cm each

Place

2020
木材パルプ 、楮、土性顔料、漆喰、金網
Wood pulp, paper mulberry, earth pigment, plaster, wire mesh
w186×d6×h186cm

Note

2020
木材パルプ 、楮、土性顔料、漆喰、金網
Wood pulp, paper mulberry, earth pigment, plaster, wire mesh
w186×d6×h186cm

Some rooms

2018
楮、麻、金属、顔料
Paper mulberry, hemp, metal, pigment
h150cm

White and Others

2017
楮、麻、金属、顔料
paper mulberry, hemp, metal, pigment
w40×d30×h180cm

Being

2016
手漉き和紙（楮）、木灰、糸、胡粉
Handmade Japanese paper, ash, thread, gofun
h170cm

新しい外面
New surface

2016
手漉き和紙（楮）、墨、糸
Handmade Japanese paper, Japanese ink, thread
w80×h150cm

金谷 アーティストインレジデンス「南総金谷芸術特区」
KANAYA Artist in residence program "NANSO KANAYA GEIJUTSU TOKKU"

あぶれの間
Overflowing room

2017
手漉き和紙
Handmede Japanese paper

千葉、金谷の旅館「金泉館」の一室全て（畳、壁、天井、小物全て）に和紙を貼ったインスタレーション作品を制作。金谷は観光客や若い移住者が多いという開かれた側面と、高齢者の多い昔ながらの集落という側面の両方を持つ町で、外人（ソトビト）と内人（ウチビト）を区別する昔ながらの思想を持ちながらも、変化しつつある今の時代に対峙し、お互いを受け入れようと試みていた。その区別は確かにあるものの、その境界は曖昧なものとなりつつあるようであった。私は部屋の全てに和紙を貼り、外 / 内、記憶 / 現在、私 / 公などの双方が行き来可能な曖昧な境界を作ることを試みた。現在における、人のあり方を探るための作品である。

I made this work in Artist-in-residence program in KANAYA,CHIBA. I put Handmede Japanese papers on the room (floor, wall, ceiling, accessories,All in the room) in the Japanese hotel. I attempted to create an ambiguous boundary where both outside / inside, memory / present, me / public etc. can come and go. It is a work to find out person's ideal relationship.

半澤 友美

Mail hanzawa.tomomi@gmail.com
Web https://www.hanzawatomomi.com/
Instagram tomomi_hanzawa

Website　Instagram

1988　栃木県宇都宮市に生まれる
2010　女子美術大学芸術学部立体アート学科卒業
2018　平成 30 年度 ポーラ美術振興財団在外研修員（アメリカ、メキシコ、カナダにて調査、研修）

【受賞 / 助成】
2019　第 19 回女子美制作・研究奨励賞 受賞
2018　ポーラ美術振興財団 平成 30 年度 若手芸術家の在外研修助成
2016　新進芸術家育成交流作品展「FINE ART / UNIVERSITY SELECTION 2016-2017」優秀賞 受賞

【個展】
2024 「Self: multiple presents」ふじ・紙のアートミュージアム / 静岡
2023 「泡沫を掴む Grab the bubbles」小松庵総本家銀座 / 東京
2022 「Narrative Act」DiEGO 表参道 / 東京
2020 「Note」MARUEIDO JAPAN/ 東京
2019 「The Histories of the Self」ポーラ美術館 アトリウムギャラリー / 神奈川
2017 「See」JINEN GALLERY/ 東京
2016 「grey integument」ガレリアグラフィカ bis/ 東京
2015 「溢るる 垂る」いりや画廊 / 東京
2013 「Black Scenery」画廊るたん / 東京
2013 「White Atmosphere」プロモ・アルテギャラリー / 東京

【主なグループ展】
2023 「皮膚で見る」MARUEIDO JAPAN/ 東京
国際現代芸術祭「中之条ビエンナーレ 2023」中之条町 / 群馬
「シン・ジャパニーズ・ペインティング」ポーラ美術館 / 神奈川
「美の予感 2023 - 象・彫・刻・塑 -」髙島屋日本橋店、京都店、大阪店、名古屋店、横浜店、新宿店
2022 「PAPER：かみと現代美術」熊本市現代美術館 / 熊本
2021 「―肌理と知覚―半澤友美・盛永省治展」日本橋髙島屋 美術画廊 X/ 東京
2020 「ポーラ ミュージアム アネックス展 2020- 真正と発気 -」ポーラ ミュージアム アネックス / 東京
2018 「新進芸術家選抜展 FAUSS」アーツ千代田 3331 メインギャラリー / 東京
2017　アーティストインレジデンス成果発表会「南総金谷藝術特区」 旅館金泉館 / 千葉
2016 「新進芸術家育成交流作品展 FAUSS」茨城県つくば美術館 / 茨城

【アーティスト・イン・レジデンス】
2023 「中之条ビエンナーレ 2023」中之条町 / 群馬
2017　南総金谷藝術特区 / 千葉

【レクチャー / トーク / ワークショップ】
2024　アーティストトーク　半澤友美展　小松庵総本家銀座 / 東京
2024　特別講座アーティストトーク　半澤友美展　ふじ・紙のアートミュージアム / 静岡
2022　オープニング・ワークショップ「たたいて紙作り！？　樹皮紙に挑戦！」PAPER：かみと現代美術
熊本市現代美術館 / 熊本
2019 「紙をつくるワークショップ」The Histories of the Self　ポーラ美術館 / 神奈川
2019　講演「紙と表現」紙のエレクトロニクス研究会 第 21 回技術研究発表＆交流会 / 東京

【コレクション】
パークホームズ荻窪三丁目 / 東京
ザ・リッツ・カールトン福岡 / 福岡
グランクレール HARUMI FLAG/ 東京
ホテル虎ノ門ヒルズ / 東京

Tomomi Hanzawa

Mail hanzawa.tomomi@gmail.com
Web https://www.hanzawatomomi.com/
Instagram tomomi_hanzawa

1988 Born in Tochigi, Japan
2010 B.F.A. Sculpture, Joshibi University of art and design, Japan
2018 Fellow of POLA Art Foundation oversea study program for artist,
Research and training in the USA, Mexico, Canada

【Award & Grants】
2019 JOSHIBI, Production/Research Encouragement Award, Japan
2018 Pola Art Foundation, Grant for Overseas Study by Young Artists, Japan
2016 FINE ART / UNIVERSITY SELECTION 2016-2017, Excellent Work Award, Japan

【Solo Exhibitions】
2024 "Self: multiple presents" Fuji Paper Art Museum, Shizuoka, Japan
2023 "Grab the bubbles" Komatsuan sohonke Ginza, Tokyo, Japan
2022 "Narrative Act" DiEGO Omotesando, Tokyo, Japan
2020 "Note" MARUEIDO JAPAN, Tokyo, Japan
2019 "The Histories of the Self" Atrium Gallery, Pola Museum of Art, Kanagawa, Japan
2017 "See" JINEN GALLERY,Tokyo, Japan
2016 "Grey integument" Galleria grafica bis, Tokyo, Japan
2015 "Afururu Taru" GALLERY IRIYA, Tokyo, Japan
2013 "Black scenery" Gallery RUTAN, Tokyo, Japan
"White Atmosphere" Gallery Promo-arte, Tokyo, Japan

【Selected Group Exhibitions】
2023 "The Eyes of the Skin" MARUEIDO JAPAN, Tokyo, Japan
International contemporary art festival "NAKANOJO BIENNALE 2023" Gunma, Japan
"Shin Japanese Painting: Revolutionary Nihonga" Pola Museum of Art, Kanagawa, Japan
"Premonition of Beauty 2023" Takashimaya Art Gallery, Nihonbashi, Kyoto, Osaka,
Nagoya, Yokohama, Shinjuku, Japan
2022 "A Quest into the World 'with' PAPER" Contemporary Art Museum, Kumamoto, Japan
2021 "Texture and Perception" Nihombashi Takashimaya 6F, X Art Gallery, Tokyo, Japan
2020 Pola Museum Annex Exhibition 2020 "Authenticity and Aura" , Pola museum annex, Tokyo, Japan
2018 "Upcoming Artist Selection FAUSS" 3331 Arts Chiyoda, Tokyo, Japan
2017 Presentation of the results of the artist-in-residence program "NANSO KANAYA GEIJUTSU TOKKU" Chiba, Japan
2016 "FINE ART/ UNIVERSITY SELECTION 2016-2017" Tsukuba Museum of Art, Ibaraki, Japan

【Artist in residencies】
2023 "NAKANOJO BIENNALE 2023" Gunma, Japan
2017 "NANSO KANAYA GEIJUTSU TOKKU" Chiba, Japan

【Artist Lectures and Talks】
2024 Artist talk, Tomomi Hanzawa Exhibition, Komatsuan sohonke Ginza, Tokyo, Japan
Artist talk, Tomomi Hanzawa Exhibition, Fuji Paper Art Museum, Shizuoka, Japan
2022 Opening Workshop, Paper making by tapping "A Quest into the World 'with' PAPER"
Contemporary Art Museum, Kumamoto, Japan
2019 Workshop, Making original paper, Tomomi Hanzawa Exhibition, Pola museum, Kanagawa, Japan
Lecture "Paper and Expression", The 21st Technical Research Presentation & Networking Session of
the Paper Electronics Research Group, Tokyo, Japan

【Collection】
PARK HOMES OGIKUBO 3CHOME, Japan
The Ritz-Carlton, Fukuoka, Japan
Grancreer HARUMI FLAG, Japan
Hotel TORANOMON HILLS, Japan